

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：20101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24650457

研究課題名(和文)言葉による自己の説明が困難な認知症高齢者のための『生活再構築アプローチ』の開発

研究課題名(英文) Developing of a re-constructive approach for the daily lives of elderly persons with dementia who can't explain their own meaningful occupations through language

研究代表者

坂上 真理 (Sakaue, Mari)

札幌医科大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：70295369

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、作業科学の視座と研究方法を用い、言葉を使って自己の状況を十分に説明できない中等度から重度の「認知症高齢者」に対して、彼らが日常を過ごす居住環境での作業の発現と変容過程を明らかにし、『生活再構築アプローチ』の開発に向けた基礎資料の提供を行った。その結果、認知症高齢者には、居住環境との関わりの中で行為の発現が認められたが、それらが意味のある活動としてまとまりを得る過程においてはその意味や文脈を媒介する職員や人々の存在が重要であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to determine the construction process of occupations for elderly persons with dementia who couldn't explain their own meaningful occupations through language from an occupational science perspective. Data was collected using a fieldwork approach over one year at a long-term facility for dementia patients in Hokkaido, Japan. Data was analyzed using qualitative research methods focusing on the process for the emergence and transformation of occupations. During this study, actions or activities were found for some residents through active interaction with the environments within the facility. However, lack of occupational unity in those behaviors, resulting from intrinsic and extrinsic factors, brought difficulty to the process of constructing occupations.

研究分野：作業科学，作業療法学

キーワード：認知症高齢者 作業科学 質的研究

## 1. 研究開始当初の背景

わが国では、急速な高齢化に伴い認知症高齢者も増加し、認知症の予防とケア、リハビリテーションのあり方が問われている。現在、認知症ケアにおいては、BPSD（認知症に伴う行動・心理状態）への対応、その人らしさを尊重したパーソナル・ケア、家族支援等が行われている。他方、認知症のリハビリテーションでは、認知機能の維持・向上や心理的安定、対人交流の拡大を目的とした非薬物療法や、行為障害を軽減するための環境調整と関わり方の検討も進んでいる。また、自分らしい生活の実現に向け、認知症高齢者が生きがいを感じられる活動や役割の提供も試みられている。しかしながら、援助の対象者が、自らの状況や望む活動について言葉を使って説明することができない場合、その症候学的特徴から周辺環境と適切な関係を築くことが難しく、援助者はその混乱した状況への対応に追われ、認知症高齢者が本来行おうとしていた能動的な行為を見逃すことも多いと考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、生物医学と社会科学の学際的な視座をもつ「作業科学」の枠組みを用いて認知症高齢者の日常生活における「作業」を捉える。作業科学は、人々が日常営む諸活動を「作業」と呼び、作業の形態、機能、意味、そして作業を営む人々の研究を行う学問である。ここでは、作業は人々がそこに付与する個人的、社会的な意味を含むとともに、人々の健康や幸福に影響するとの前提にたっている。さらに、作業科学の視座を用いることで、認知症高齢者が居住環境の中で営む日常の活動(すなわち、作業)を、主体の意思や認知機能を含めた個人因子だけではなく、時間的文脈、空間的文脈、文化的

文脈から全体論で捉え、包括的な支援策の検討につなげることができる。

## 2. 研究の目的

1) 本研究の目的は、作業科学の視座と研究方法を用い、言葉を使って自己の状況を十分に説明できない中等度から重度の「認知症高齢者」に対して、彼らが日常を過ごす居住環境での作業の発現と変容過程を明らかにすることである。これにより、人 環境 行為(活動)をつなぎながら認知症高齢者の日常の活動を援助することで、その人が積み上げてきたその人らしさと誇りある生活の構築を目指す『生活再構築アプローチ』の開発に向けた基礎資料の提供を行うものである。

## 3. 研究の方法

本研究は作業科学と医療人類学の学際共同研究である。

### 1) 現地(フィールドワーク)調査

本研究は、少人数単位で家庭に近い居住環境を提供する認知症対応型共同生活介護(以下、グループホーム)のうち、継続的な調査への同意が得られた特徴が異なる2施設にて調査を実施した。対象は、そこに入居する認知症高齢者、職員、面会に来る家族であった。データ収集には、フィールドワークとインタビューを行った。研究責任者と研究分担者が、それぞれ月1回から4回の参与観察を断続的に行った。

参与観察：研究者は、入居中の高齢者が余暇活動、家事、セルフケア等を行う場面にいて、より自然な状態における日常生活活動(すなわち、作業)に焦点をあて、行為、会話、職員と高齢者、高齢者同士の関わりを観察し

フィールドノートに記録した。

インタビュー：施設職員とカンファレンスを実施し、調査報告とインタビューを行った。

## 2) 文献調査

作業科学と関連する領域の文献調査を行い、収集したデータの解釈に最もふさわしい作業科学の理論を検討した。

## 4. 研究成果

1) 調査施設の入居者のうち、環境への能動的な働きかけが認められた3名を対象に、彼らが環境へ働きかける行為とその変容パターンを明らかにした。分析の結果、3名の入居者が環境に働きかけた場面は合計76場面であった。それらは働きかけの目的から「承認・支持」「援助・協力」「世話・配慮」「確認」「感情表出」の5つのカテゴリーに分類された。さらに、3名の入居者が環境に働きかける行為について、その発現と変容の過程に着目したところ、4つの変容パターンが見出された。すなわち、職員に先導されて行為が発現し、周囲の人々と行為の意味を共有し、意味ある行為や作業へと展開する、職員に先導されて行為が発現するが、周囲の人々と行為の意味が共有されず、意味ある行為や作業へ展開しない、各対象者がアクセスしやすい環境刺激へ働きかけることで行為が発現し、周囲の人々と行為の意味を共有し、意味ある行為や作業へとさらに展開する、各対象者がアクセスする環境刺激へ働きかけるが、周囲の人々と行為の意味が共有されず、意味ある行為へと展開しない、の4つのパターンが認められた。以上より、3名の入居者の環境への働きかけは、職員の行為に先導されて生じる場合と、対象者がアクセスしやすい環境につ

ながって生じる場合があった。また、行為が生じた後、行為の意味が周囲の人々（職員・家族ほか）と共有されるかどうかによって、行為の成立や作業への展開が異なることが示唆された。

2) 認知症高齢者が生の基盤を他者に依存しながらも、能動的に他者に働きかけて自立や尊厳を保とうとする行動を分析し、それをふまえて介護者が「自立と援助のバランス」をいかに考慮し、入所者の生活支援に活かしていくのかということ考察した。調査から、2つのテーマが明らかとなった。〔他者への気遣い〕入所者のほとんどは、生きるために最低限必要なことを介助されて生活しているが、自分ができること、人のためにしたいことは行い、他者にささやかな気遣いをする。ある人は、自分で歩くこと、だれかに関心を示すこと、だれかの膝から落ちた毛布を拾ってたたむことを何の意図もなくしている。またある人は、他の人が咳をすると心配そうな表情をしている。またある人は、だれかが何気なく発したことばに反応し、会話をつなごうとしている。こうした他者への気遣いに、介護されながらもなお主体的に他者とかかわろうとする意思があらわれている。〔記憶の世界でつむがれるいのち〕入居者の行動や会話を読み解くと、離れて暮らす家族や親族との関係が、それぞれの人の記憶の世界で、今もなおつむがれていることがわかる。ある人は、調査者に会うたびに「いつ来たの、一緒に帰ろう」と気持ちを高揚させる。記憶の世界が現実を包み込み、調査者のそばをはなれようしない。しかし、職員が、その人にクッションをもたせて、「もう少ししたら食事だよ」「明日にしよう」と話しかけることによって、そ

の人の記憶の世界で生起する反応は、「帰宅願望」と解釈され、それへの一般的な対処法で抑制され、本人も現実の世界に戻っていく。

3) フィールドワーク調査期間に大腿骨頸部骨折を受傷し骨折後早期に以前の生活を取り戻した一事例を対象に、受傷前後の環境との関係と作業の変容過程を検討した。特に、環境との関係については、他入居者、職員、そして事例を取り巻く空間や場所に着目して分析を行った。その結果、受傷後の回復過程では、事例と他入居者との関係や事例の作業が明らかに異なることが認められた。すなわち、受傷後には、事例から他入居者へ働きかける場面が増加するとともに、以前は認められなかった他入居者との交流や共に作業を行う様子が観察された。このような変化は、安全・安心を確保するために職員が事例に対してとった関わり方や居住スペースの変更がきっかけとなり、事例の自分自身に対する経験と事例を取り巻く人々に対する経験が変わったために生じたことが示唆された。

4) 「書き物をする」という日課の遂行において、行為の保続や断片的な遂行が認められた事例を対象に、行為の発現と変容の過程並びに行為遂行中の事例の経験を検討し、作業の構築過程を考察した。その結果、彼女が日常的に遂行している日課は、必ずしも明確な終わりがなく、日課を構成する一部の行為が繰り返された。また、行為の遂行は環境刺激によって容易に阻害され、作業としての行為のまとまりを欠いていた。作業の構築に至らなかった背景には、行為遂行の目的の保持に関わる事例の認知機能障害に加え、一貫性のない用紙やそこに書かれた断片的な文字といっ

た外的な要因のため、作業を形作る文脈の喪失が関与していたことが示唆された。

5) 認知症ケアにおいて馴染みの関係の重要性が指摘されているが、その構築過程については十分な報告がない。そこで、認知症高齢者が、日常を過ごす居住環境の中で日々の作業を通してどのように馴染みの関係をつくり経験しているかを検討した。中等度から重度の認知症高齢者を対象とした本研究の結果では、馴染みの関係は、決まった人々との間で結ばれる固定された関係ではなく、作業を通してその時々構築される動的な過程であり、入居者の働きかけを媒介する人の存在が重要であることが示唆された。

6) 作業科学における場所と作業の関係に関わる文献を調査し、これまでのフィールドワーク調査で得た示唆をもとに『生活再構築アプローチ』の開発に必要な視座を検討した。作業科学は、私たちの作業と環境や場所との深い結びつきを指摘しているが、場所を外的な側面や位置といった特徴から捉えるだけではなく経験的な側面からも捉え、作業に対する環境や場所の影響が検討されるに至った (Zemke, 2004, Hamilton, 2010, Hseelkus, 1998, 1999)。特に近年は、人が作業と結びつく過程におけるプレイス・メイキングが着目されている (Zemke, 2004, Johansson et al, 2013)。認知症高齢者の支援に関して、この概念は従来のスタティックな環境支援から動的なプロセスへの働きかけへと転換する重要な視座となりうることを示唆された。

<引用文献>

Hamilton, T. B. (2010). Occupations and

place. In Christiansen, C. H. & Townsend, E. A. (Eds.), *Introduction to occupation: The art and science of living 2<sup>nd</sup> ed.* Upper Saddle River, NJ, Pearson. pp.251-280.

Hasselkus, B. R. (1998). Occupation and well-being in dementia: The experience of day-care staff. *American Journal of Occupational Therapy*, 52, 423-434

Hasselkus, B. R. (1999). Occupational space and occupational place. *Journal of Occupational Science*, 6, 78-79.

Josephsson, S. (2009). Astrid and Japanese cherry tree: A reflection on transformation and occupation, *作業科学研究*, 3, 14-19.

Zemke, R. (2004). Time, space, and the kaleidoscopes of occupation. *American Journal of Occupational Therapy*, 58, 608-620.

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

坂上真理, 作業科学における場所の再考: トランザクションの視点から, 作業科学研究, 査読無, 受理 (vol.9, 2015 予定)

道信良子, 人間の文化的多様性を理解する - 医学・医療系大学教育における文化人類学の貢献 - , 医学教育, 査読有, vol.44, 2013, pp.274-278, [http://mol.medicalonline.jp/library/journal/download?GoodsID=ed9jmded/2013/004405/002&name=0274-0278j&UserID=163.130.15.4&base=jamas\\_pdf](http://mol.medicalonline.jp/library/journal/download?GoodsID=ed9jmded/2013/004405/002&name=0274-0278j&UserID=163.130.15.4&base=jamas_pdf)

〔学会発表〕(計5件)

坂上真理, グループホームに入居する認知症高齢者の馴染みの関係の再考, 第49回日本作業療法学会, 2015年6月20日, 神戸国際展示場(兵庫県・神戸市)

道信良子, 坂上真理, 認知症高齢者の自立と尊厳 - 自立と尊厳の基盤を他者の関係性に求めて - , 第29回日本保健医療行動科学会, 2014年6月22日, 筑波大学文京キャンパス(東京都・文京区)

Mari Sakaue, Ryoko Michinobu, Changes to relationships, environments, and occupations for elderly persons with dementia following decrease physical mobility, 16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapy, June 19th, 2014, パシフィコ横浜 (Yokohama, JAPAN)

Mari Sakaue, Tomoko Kondo, The construction of occupations for elderly persons with dementia, The Society for the Study of Occupation: USA, 12th Annual Research Conference, Oct 17th, 2013, Lexington, Kentucky (USA)

坂上真理, 認知症高齢者が行う環境への働きかけ - グループホームにおける行為とその変容パターン - , 第47回日本作業療法学会, 2013年6月29日, 大阪国際会議場(大阪府・大阪市)

〔その他 招待講演〕(計3件)

道信良子, 身体を知る・病気を診る - 医療人類学の視点から, 北海道家庭医療学センター講演会, 2015年3月25日, 北海道家庭医療学センター(北海道・札幌市)

坂上真理, 佐藤剛記念講演 - 作業科学における場所の再考, 第18回作業科学セミナー,

2014年11月15日, YIC リハビリテーション  
ン大学校(山口県・宇部市)

坂上真理, 認知症ケアに使えるリハビリテ  
ーションのポイント - その人らしさを支える  
アクティビティと環境づくりの再点検 - (公  
社) 全国有料老人ホーム協会北海道連絡協議  
会主催認知症ケア研修会 2014年9月25日,  
かでの2・7(北海道・札幌市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

坂上 真理 (SAKAUE, Mari)  
札幌医科大学・保健医療学部・准教授  
研究者番号: 70295369

### (2) 研究分担者

道信 良子 (MICHINOBU, Ryoko)  
札幌医科大学・医療人育成センター・  
准教授  
研究者番号: 70336410